『ファウスト』雑感 IX
－ジェンダー－

Notizen über „Faust“ 9
－Gender－

漆　谷　克　秀
Katsuhide Urushidani

９．ジェンダー

1990 年代の中頃から、「ジェンダー」という言葉が使われるようになってきた、と記憶している。当時、「女性学」(たいていは「女性と～」という名称)という講義科目が時勢に乗り遅れないかのように増設された。「女性」を知ることは「男性」を知ることでもある、などと言われ、自分が分からないのにどうして「女性」がわかるのだと、密かに悩んでいた。「ジェンダー」とは、男女両性間の「社会的・文化的性差」だと、ある男性からこっそりと教えてもらった。わたし個人としては、男女の性別によらずとも、感覚や認識、行動に個々それぞれが違っていて当然のことと思っている。しかし、「男らしさ･女らしさ」などと、男、女を全体的に包含して論述されることも多い。また、生物的性差は明白なのであり、それをもって厄介な仕事や煩わしいことを忌避する方々もいる。

若桑みどり氏が、その著書で「ジェンダー」の定義づけをしている。少し強烈ではあるが、わたしも妥当なものであると考えている。

> ジェンダーとは、人間が個体としてもっている生物学的性のことではない。生物学的にいえば、女は出産機能をもっており、男はもっていない。これが両性の生物学的差異である。ジェンダーと私が呼んでいるものは、この男女の生物学的差異に、社会的、文化的意味を与え、社会的に認知された両性の差異をつくりだし、これに基づいて社会関係を組織することである。この「文化的・社会的につくりだされた性差」および「それに基づいて組織された社会関係」をジェンダーと呼んでいる。(若桑みどり『象徴としての女性像、ジェンダー史からみた家父長制社会における女性表象』筑摩書房。２０００年、４～５ページ)

「ジェンダー」とは、社会的、文化的につくりだされた性差に基づいて組織化された社会関係であって、なにも女性に与する概念というわけではない。若桑氏はここで、ヨーロッパの古代ギリシャより綿々と続いている父権に基づいた家父長制社会に対する原理的な鋭い批判を行っている。

「紡ぐ女」の図像は、家父長制社会によってつくりだされた、と若桑氏は指摘する。古代、中世、近世を通じて、「紡ぐ女」のイメージは「勤勉」と「貞節」の記号になってきた。そして、「紡ぎ」と「織り」は婚礼に結びついていくのだ。古代ギリシャのホメロスの『オデュセイヤ』に登場する妻ペネロペイヤや『聖書』のエバなど、その労働は「糸紡ぎ」で代表されている。また、女性と労働の問題が、ジェンダーの根源に関わる問題として近世前期の織布産業を取りあげ、家庭で社会で女性労働が収奪されてきた問題を述べる。「女性は運命的な労働として「糸紡ぎ」を課せられ、糸紡ぎをする女性は「貞淑」のシンボルとして娼婦と対置されてきた。これは単純で、創造性がなく、極めて無償の労働であった」(前掲書、497ページ)とする。仕事とは総じて単純なもので、同じようなことを繰り返す。だが、果たして創造性がなく、無償の労働であったのかどうか、異論も出てくるであろう。しかし、「紡ぐ、

織る」は女性の家内労働として維持されてきたし、現代の織布産業も、低賃金の国々の貧しい女性たちの労働にまかなわれていることは否めない現実である。

先に「糸を紡ぐグレートヒェン」を取り上げた。糸車の側にいるグレートヒェンは、ファウストのことを想いながら、糸を紡いでいる。糸紡ぎは、女性の日常的な家内労働であり男性に収奪されているなどと、グレートヒェンは思っていない。きっと思っていないはずだ。ゲーテはおそらく、市民生活のありふれた日常の情景として、糸を紡ぐ糸車の回る音とともに、グレートヒェンの想いを奏でるように表白していったのだ。

「ジェンダー」には、男女両性の生物学的差異がその根本にあるのは否めない。つまり、女性は出産機能を持っているということである。処女、婚約、結婚、出産、育児、家庭、そして家系と、倫理的な社会規範に沿ったところに、ジェンダーが生じたのであろう。それは、母性を保護する一面もあるのだが、女性を拘束することにもなって、様々な悲劇を生み出すこととともなる。この作品でグレートヒェンは、ファウストの子を出産し、やむなく死なせてしまった。結婚もせず、私生子を生んだ女性は、この時代、どのように見られていたのか、この作品から考えてみる。

ゲーテは22歳のとき(1771年)、フリーデリーケのもとを去ってフランクフルトに戻り、弁護士を開業する。その年の10月に、グレートヒェン・モティーフになった、嬰児殺しの女、ズザンナ・マルガレータ・ブラントの裁判があって、死刑判決を受ける。翌年の1月にゲーテの住居近くの広場で公開処刑が行われた。ゲーテは、裁判にも処刑にも居合わせている。ちなみに、39歳のゲーテは、1788年7月に23歳のクリスティーネ・ヴルピウスと知り合い、1806年に正式に結婚するまで、18年間同棲していたのである。1789年に長子アウグストが誕生している。その後、幾人もの子供を出産しているが、すべて夭折。妊娠、出産の繰り返しに、クリスティーネの母体は衰弱していったのであろう。1816年クリスティーネは亡くなっている。私生子を生むということが、社会的にどのような悲劇を生むのか、ゲーテはよく知っていたはずであるのにクリスティーネに私生子を生ませ続けていたのである。ゲーテだから、社会的に認められていたということなのであろうか。

ファウストとグレートヒェンは「マルテの庭」(Marthens Garten)で逢瀬を楽しむ。そしてグレートヒェンは、ファウストの望みを充たすため、夜、自分の部屋にファウストを迎えいれる約束をする。その夜、二人は関係を結ぶことになるのだが、グレートヒェンは、しつけの厳しい母親にファウストから与えられた睡眠薬を飲ませるのである。そのため母親は命を落とすことになり、その後、グレートヒェンは、ただ悲劇の一途をたどることになってしまう。しかし、先に見たように、グレートヒェンは、救済される。そして、『ファウスト』劇の最終場で、すべての悪事の責任をメフィストフェレスになすりつけ、なにひとつ良いことをしていないファウストが、このグレートヒェンに導かれて救済されるのである。わたし個人としては、地獄に落とせ、と思うのだが、この「救済」についてはいつか論述したいと考えている。ただ、ファウストの救済には、一部のこの場が大きな役割を果たしているようにも思える。

さて、「泉のそば」(Am Brunnen) で、グレートヒェンはリースヒェン (Lieschen) とバルバラ (Bärbelchen) のことでおしゃべりをする。おしゃべりの大部分は噂話 (ロビン・ダンバー『言葉の起源』青土社) といわれており、それは対象の不在を埋めるためのものである。(ここは山極寿一、小川洋子『ゴリラの森、言葉の海』新潮文庫からの孫引き。この書は、人間が生きていく根源をゴリラや他の類猿人の生態から比較検討し、「ジェンダー」についてもいろいろと考えさせられる示唆に富んだ対談集です。一読を勧めます) バルバラは性根の悪い女にようで、この噂話は悪口になっている。バルバラはつまらない男にだまされ、お腹には子供がいるようである。それを聞いたグレートヒェンは、「かわいそう！」という。

GRETCHEN. Das arme Ding!
LIESCHEN. Bedauerst sie noch gar!
Wenn unsereins am Spinnen war,
Uns nachts die Mutter nicht hinunterließ,
Stand sie bei ihrem Buhlen süß,
Auf der Türbank und im dunkeln Gang
Ward ihnen keine Stunde zu lang.
Da mag sie denn sich ducken nun,
Im Sünderhemdchen Kirchbuß' tun!
GRETCHEN. Er nimmt sie gewiß zu seiner Frau.
LIESCHEN. Er wär' ein Narr! Ein flinker Jung'
Hat anderwärts noch Luft genug.
Er ist auch fort.
GRETCHEN. Das ist nicht schön!
LIESCHEN. Kriegt sie ihn, soll's ihr übel gehn.
Das Kränzel reißen die Buben ihr,
Und Häckerling streuen wir vor die Tür! Ab. (3562-76, S.113-4)

グレートヒェン. かわいそう！
リースヒェン. 彼女のこと、まだ同情しているの！
わたしたちなんかが、糸を紡いでいるときに、
夜、母さんが外に行かせてくれないときに、
彼女、戯れて甘い思いをしていたの。
戸口のところのベンチで、暗い通路で、
時間の経つのも忘れてね。
だからもう、身をかがめて、
罪人の肌着を着けて、教会で悔い改めればいいのよ！

グレートヒェン.　その人、彼女をお嫁さんにするわ。
リースヒェン.　彼が馬鹿だったらね！　素早い若者なら
　他のところへ行ってほっとしているはず。
　彼は逃げてしまったのよ。
グレートヒェン.　　ひどいことを！
リースヒェン.　もし彼女がその男と結婚してもまずいことになるでしょう。
　花冠を男たちが引きちぎるでしょうし、
　刻んだわらをわたしたちだって戸口にまいてやる。（去る）

リースヒェンのこの悪口にはやっかみが含まれている。なにかうらやんでいるような感じもある。悪口にはそのようなものが多い。それにしても、同性でありながら、リースヒェンはバルバラをジェンダーの視点から糾弾しているのだ。女の子として社会的に期待されていること（ここでは「糸を紡ぐこと」、「夜家にいること」）から逃げているバルバラを激しく糾弾しても、ジェンダー社会から容認されると、リースヒェンは考えているのだろう。そしてそれが、社会のジェンダー役割を示すもので、社会一般の規制でもあった。当時、まともな女性は結婚するまで処女であることが当然視されていて、未婚のまま子を宿すことは、教会で告解しなくてはならない要件だったのだ。

グレートヒェンは、バルバラが花嫁になることを期待する。しかし、その男はもう素早く逃げてしまっていることをリースヒェンは告げる。本来ならば、この男にも責任があるのだから、告発されねばならないはずだ。それなのに、もし結婚するとなれば、祝福するのではなく、男たちは花嫁の花冠を引きちぎり、女たちは藁くずを家の前に撒くといって、バルバラだけを責めるのである。まさしくジェンダーによる告発で、娼婦に貶める行動である。そしてそれが、グレートヒェンにも待ち受けているのを、自身が感じている。帰宅の途上、グレートヒェンは、つぶやく。

GRETCHEN nach Hause gehend.
　Wie konnt' ich sonst so tapfer schmälen,
　Wenn tät ein armes Mägdlein fehlen!
　Wie konnt' ich über andrer Sünden
　Nicht Worte gnug der Zunge finden!
　Wie schien mir's schwarz, und schwärzt's noch gar,
　Mir's immer doch nicht schwarz gnug war,
　Und segnet' mich und tat so groß,
　Und bin nun selbst der Sünde bloß!
　Doch – alles, was dazu mich trieb,
　Gott! war so gut! ach war so lieb!　　(3577-86, S.114)

グレートヒェン （家に帰る道すがら）.
わたしは今まで、かわいそうな娘が
過ちを犯したりしたら、したたかにけなしていた！
他の人が犯した罪には、
いくらしゃべってもまだまだ口について出るほどだった！
黒く思えたものには、もっと黒く上塗りして、
それでもわたしには、十分に黒く思えなかった、
それで神に祈って、偉そうにしていた。
なのに今は、自分が罪を負っている！
だが、―　そこまでわたしを追い立てたことすべて、
神さま、良かったのです！　ああ、うれしかった！

グレートヒェンは、今まで糾弾する先鋒に立っていたようだ。救いの手を伸ばすべきなのに、罪にさらに罪をなすりつけるようなことをしていて、どこまでしても、グレートヒェンの気持ちは収まらないような状態にあったようだ。おそらく「神」の名をもってして追いつめていたのであろう。ジェンダーは、男社会の都合の良いように造られているようだが、その保守、維持には、女性も大きく関与してきたといってもよい。同性であるが故に、その度合いも高まることがあったとも考えられる。また、見せしめということであり、自身では気づいていない不安や鬱屈が過激な行動に走らせることもあったであろう。しかし、自分自身のことになると、恐れを感じているし、悔いも残っている。だが、ファウストとの恋愛には、短い快楽ではあったが、後悔もなく、ファウストへの想いが心の中に温められてる。

帰宅の途上なのであろうか、市壁のくぼみにある「悲しみの聖母像」(Andachtbild der Mater dolorosa) に花をおいて、グレートヒェンは祈るのである。「お助けください！　わたしを辱めと死からお救いください！」(Hilf! Rette mich von Schmach und Tod!)(3616, S.115) グレートヒェンは、日常のひそやかな幸せをすべてファウストに捧げつくした。いま、罪と不幸が降りかかってくることを感じている。だが、信仰をなくしていないし、罪をあがなうことも忘れてはいない。死んだイエスを胸に抱く「悲しみの聖母マリア」に祈りを捧げるグレートヒェンの姿を想うだけで、目頭を押さえてしまう。そしてこの場が、第二部第五幕の最終の場で、グレートヒェンの願いによって「栄光の聖母」にファウストが救済されていくことに結びついていくように思える。

少し時間が経ったのであろう。市井ではグレートヒェンの噂が広まっていた。兵役を終えて帰ってきた兄のヴァレンティンは、男たちの話から自慢の妹であるグレートヒェンの堕落を知るのである。そして、グレートヒェンの家の前で当事者であるファウストとメフィストに出くわし、わけのわからない妖しげな決闘のすえ、致命傷を負って、命を失うことになる。騒ぎを聞いて、すぐに群衆が集まってくるが、その前にファウストとメフィストフェレスは

逃げてしまっている。

ヴァレンティンは、家から出てきたグレートヒェンにその非を責めたて、「娼婦！」(du, Metze!) とののしる。また、罪もないのに、生まれてくる子を「恥辱」(die Schande) と呼んでいる。さらに、隣家のマルテに対しても「下劣な取り持ち婆！」(Du schändlich kupplerisches Weib!) とそしる。おそらくマルテは、メフィストフェレスから金目のものを握らされているのであろう。レンブラントやフェルメール、ラ・トールなどの 17 世紀の画家たちに、「若い女」と「取り持ち婆」そして「金をちらつかせる男」がモティーフになっている作品があったと記憶している。これらの絵画は当時の社会風俗を描いているのだが、このようなことで、女性だけが咎を受けるような風潮において組織化された社会ならば、それはジェンダー社会と呼べるであろう。死んでいくヴァレンティンは、グレートヒェンに罵詈雑言をあびせる。

VALENTIN.　・・・・・・

Ich seh' wahrhaftig die Zeit,
Daß alle brave Bürgerleut',
Wie von einer angesteckten Leichen,
Von dir, du Metze! seitab weichen.
Dir soll das Herz im Leib verzagen,
Wenn sie dir in die Augen sehn!
Sollst keine goldne Kette mehr tragen!
In der Kirche nicht mehr am Altar stehn!
In einem schönen Spitzenkragen
Dich nicht beim Tanze wohlbehagen!
In eine finstre Jammerecken
Unter Bettler und Krüppel dich verstecken
Und, wenn dir dann auch Gott verzeiht,
Auf Erden sein vermaledeit!　(3750-63, S.119)

ヴァレンティン.　・・・・・・

おれにはもう、その時のことが見えるようだ。
まともな一般市民たちが、
まるで疫病に罹った死骸をさけるように、
売女め！　おまえを避けて離れていく。
もしやつらがおまえの顔をまともに見たりしたら、
おまえの心臓も躰の内でひるむことだろう。
もしやつらがおまえの眼をのぞき込むようなら、

おまえはもう金の首飾りも着けることはできまい！
教会で祭壇のそばに立つこともできない！
美しいレースの襟がついた服で
踊ったところで快くもあるまい！
陰鬱な悲惨な町の片隅で
乞食たちや不具のものたちの中におまえを紛れ込ませる
そして、たとえおまえを神が許してくださっても、
この地上では呪われている。

これはもう、呪詛であろう。省略されていると思える主語は、動詞の形からして「まともな一般の市民たち」(alle brave Bürgersleut') である。ヴァレンティンの台詞であるが、市民たちの声であり、市民社会からの排除を示唆している。「疫病に罹った死骸」のようだといわれて、市民の顔をまともに見ることもできず、逆に見詰められると、身が縮むような思いをすることになる。しかし、世間から忌み嫌われながらも、社会の片隅で生きていかなければならない。「売春」があることは「買春」があることで、「売春」だけが責めたてられるのは、現代も変わらないようだ。このような社会を形成する基盤の一つが、教会であろう。たとえ告解によって罪の許しを得たとしても、教会の規律には反している。

グレートヒェンは、ミサ (Amt) が執り行われている「大聖堂」(Dom) に行く。オルガンの音が響き渡り、聖歌が聞えてくる。ミサに参列する多くの人々の中にいるのだが、グレートヒェンの背後には「悪霊」(Böser Geist) がついている。それが、祈ろうとするグレートヒェンを背後から責め苛む。合唱もオルガンの音も、間を埋めるように、責めたてるのである。

BÖSER GEIST.　・・・・・・
Betst du für deiner Mutter Seele, die
Durch dich zur langen, langen Pein hinüberschlief?
Auf deiner Schwelle wessen Blut?
– Und unter deinem Herzen
Regt sich's nicht quillend schon
Und ängstet dich und sich
Mit ahnugsvoller Gegenwart?
GRETCHEN.　Weh! Weh!
Wär' ich der Gedanken los,
Die mir herüber und hinüber gehen
Wider mich!
CHOR.　Dies irae, dies illa
Solvet saeclum in favilla.

Orgelton.　　(3789-99, S.120)

悪霊.　　・・・・・・

おまえは母親の魂に対して祈っているのか？　母親は
おまのおかげで長い長い地獄の苦しみへと眠りについたのだ
おまえの家の閾の血は誰のものだ？
おまえの胸の下には
わき出るように、もううごめいているものがある。
今ここで不吉な予感を抱きながら
それはおまえを不安にさせ、自身も不安にさせている。

グレートヒェン.　ああ、悲しい！　苦しい！

わたしにむかって行ったり来たりして
わたしを責める
この想いから自由になれれば！

合唱.　　イカリノ日、ソノ日は
ワレラノ時代ヲ溶カシテ灰トナス。

（パイプオルガンの音響）

わたしがラテン語を読めるのではないかという誤解を解かねばならない。合唱の詩句については、原注にドイツ語訳があり、それを訳している。この聖歌の合唱は間奏のようにして続いていく。原注によると、ここでグレートヒェンは、最後の審判のラッパで、死者たちの覚醒と審判の始まることをこのフランシスコ修道会の聖歌から聞いているのである。

それにしても、教会の中に悪霊がいるのはどういうことなのか。神に反旗を翻し、神の世界を破壊しようと堕ちてしまった悪魔とは別物なのであろう。背後にいて、グレートヒェンに罪状を告げていく。この悪霊の姿はグレートヒェンに見えていないのであろう。悪霊があげつらう母親の死、兄の死、それらに対する罪をグレートヒェンは、十分に自覚しており、繰り返し、自責の念に駆られている。お腹に宿した生命は、社会の規範から外れた存在なのだ。それを身ごもるグレートヒェンには、ジェンダーを定めて、そこに封じ込めようとする倫理、社会、文化が待ち受けている。そして、悲劇が生まれる。

現在、ヨーロッパやアメリカでは、事実婚や婚姻の手続きをしていないカップルから生まれている子供たちが相当数に上るという。少子化という現象の中で、社会の人口構成を考えたとき、この子供たちにも、正式の夫婦間に生まれた子供たちと同等の支援と保護がなされていると聞く。日本でも同様の事例が増大しているわけで、同じような支援と保護が求められるのが急務であろう。

もうひとつ気になることがある。1970 年代に妊娠をコントロールできる薬ができて、広

く使われるようになる。それとともに「フェミニズム」運動が世界中に広まり、目立つような時代でもあった。「フェミニスト」だと自認する男性が多く出て、わたし自身はそんな輩が嫌いであった。日本でも、元気なおばさんたちが「女権拡大」を旗印にして「中ピ連」という団体を立ち上げた。ピンクのヘルメットを被って、女性を虐待した男性や職場などを襲い、マスコミにもよく取り上げられていた。それで、国政にうってでたが、選挙では一議席もとれなかった。有権者は男女とも、ただ興味本位にしかその活動を見ていなかったということだ。有頂天になっていたのであろう。中ピ連の代表は、記者会見をして会を解散し、「専業主婦」に戻る、と言ったのをよく覚えている。「なんだ！」と思ったからだ。

「フェミニズム」と「ジェンダー」とは、何処に相違点があるのだろう。同じ系列で考えられるのでもあろうが、若い頃に「フェミニズム」という言葉を聞いたときには、なにか社会の価値観を転換させるような革命の感触を抱いた。女性の権利の拡張のために、男性をないがしろにするような言動も多かった。定年退職した夫を「濡れ落葉」と呼び、さげすむような発言に終始する婦人連合会の醜いおババ様には、腹わたが煮えかえる思いがした。思い違いをしているかもしれないが、「ジェンダー」には、「男女共同参画」という言葉が浮かび、男女が共同して参加し、構築していく社会を目指すようなそんな方向性を抱いた。しかし現在では、LGBTQ+ などと性の多様性を認めることが求められている社会となってきた。従来の性別に基づくジェンダーの役割に適合できずに生きる人間を認める社会へと展開していくことが、あらゆる人間に求められているようだ。よくモットーにあげられるシモーヌ・ド・ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という言葉も再考されねばならない。性多様性が容認される社会で「女になる」とはどういうことなのか。

また、家事や家内労働に人権の収奪が認められるとするなら、「専業主婦（夫）」をこの社会でどのように位置づけるべきなのかも考えなければならない。

（2022・3・20）